３－１０

様式２

主題	若年性認知症の人が一般デイサービスに馴染んだ！！
副題	若年者専用デイサービスの方が地域の一般デイサービスに馴染むまで

役割意識の保持	気の合う利用者との出会い

研究期間	１２ヶ月	事業所	台東区立やなか高齢者在宅サービスセンター

発表者：森　秀樹（もり　ひでき）	アドバイザー：千葉　明子（ちば　あきこ）
共同研究者：	

電　話	03-3824-1094	メール	yana-toku@bz03.plala.or.jp
ＦＡＸ	03-5685-3596	ＵＲＬ	http://www.yana-toku.com

今回発表の事業所やサービスの紹介	台東区社会福祉事業団が母体であり、平成元年６月に開設。特別養護老人ホーム・ショートステイ・居宅介護支援事業所・地域包括支援センターを併設。下町情緒を残す活気溢れる環境で、各事業が密に連携を図り、地域福祉の中核を担う施設運営を目指しています。

《１．研究前の状況と課題》

○　ご本人は、遠方の若年者専用デイサービスにパスネットを利用し自力通所している。今後、認知機能が低下し通所困難となった場合、地域のデイサービスに移行する為、やなかデイサービスを併用して利用することになる。
若年性の人を受けることは、初めての為、事業所としてどのように支援するか課題であった。

《２．研究の目標と期待する成果・目的》

○　平均年齢が８４歳の一般高齢者デイサービスで、若年性の人が「いきいき」と通所できることを期待して、役割意識を保持でき、気の合う利用者と交流できるように取り組んだ。

 ※無断転載・複製を禁じます

《３．具体的な取り組みの内容》

○ 事前のサービス担当者会議で、本人・妻の意向を確認し、関係機関（居宅介護支援事業所・地域包括支援センター・若年者専門デイサービス）からの情報や助言を受ける。

○ ご本人は社会的役割意識が高く「誰かの役に立ちたい」との思いが強くあった為、役割意識を保持しながら、デイサービスに参加できるように支援した。

○ ご本人が、安心して過ごせるよう、活動内容やご利用者との交流・職員の対応を模索しながら支援した。

《４．取り組みの結果と考察》

○ 事前のサービス担当者会議に参加することで、関係機関からの助言や情報共有することができ、支援方法が明確になった。

○ 洗濯たたみや食器を拭いてもらう等の軽作業をお願いすることで、役割意識を保持しながら参加することができている。

○ 年齢が近く、気の合う利用者Ａさんとの出会いがあったことで、活動に慣れてきて、当初は、リハビリなど限られた活動しか参加できなかったが、少しずつ異なる活動、書道やカラオケにも参加できるようになっている。

○ 気の合うＡさんが併設のショートステイ利用中でも、ショートステイ担当と連携し、２人が交流できる場を提供した。

○ ご本人が混乱しないよう、１日の予定表を渡すことで、安心感を持って過ごす事ができている。

○ 中心となる担当者との関係づくり（１ヶ月）を行った後、他の職員がかかわるようにしたことで大きな混乱なく参加できている。

○ ご本人の気落ちを理解する為に、個人面談や妻との連絡を密にした。職員とご本人の気持ちにズレの修正に繋がった。

《５．まとめ、結論》

○ 高齢者が占める場でも、軽作業を依頼し、職員が感謝の気持ちを伝えることで、ご本人は役割意識を保持することができた。また、利用者Ａさんとの出会いや、更に、ご本人が一般デイに馴染もうとする強さが、利用継続に繋がった大きな要因と思われる。利用できることになって、介護者である妻の精神的負担軽減にもなった。又、今回の新たな経験が、事業所の質の向上にも繋がっている。

○ 今後の展望

若年性の人に合った地域の社会資源は不足している為、今後も一つ一つの経験を積み重ね、支援方法や支援技術の向上を目指し、若年性の人も通えるデイサービスを構築していきたい。

《６．倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人とご家族に発表目的、発表方法などについて口頭で説明をし、同意を得た。

《７．提案と発信》

○ 若年者専用デイサービスに比較すると、サービス内容や職員のスキルは劣りますが、役割意識の保持ができ、気の合う利用者さんと交流を持てることで、親近感が湧き利用に繋がる要因の一つになると実感しました。

地域の若年性の方が利用しやすい施設情報の集約ができるような、地域での取り組みが必要であると提案します。

【メモ欄】

 ※無断転載・複製を禁じます